

割り箸回収活動における課題の分析

～質的調査法を用いて～

福井先生指導(教職課程)

P02007 阿比留悠

私が所属しているサークルは、麻布大学およびK商店街という2つのフィールドにおいて、割り箸回収活動をおこなってきた。回収後の割り箸は、製紙工場に送られて紙製品の原料となっている。これまでの活動を通じて、回収に協力していただいているK商店街の人々が、活動にどのような思いをいただいているかについて知りたいと考えた。また、それを知ることによって活動の成果と課題を明確にし、今後回収の輪を広げていくための方策を検討できると考えた。そこで、以下を研究目的とした。

(1) K商店街における割り箸回収活動の成果と課題を明らかにする。

(2) どのような工夫をすれば回収活動の輪が広がるかを検討する。

ところで、調査法は一般に、アンケートやインタビューを数量化して分析する「量的調査法」と、フィールドでの体験などを数量化せずに分析する「質的調査法」に分けられる。本研究では、主に後者を用いることにした。通常のアンケートでは聞き出せないような、店側の本音の部分を知りたかったからである。

調査手順として、まず、日常の回収における会話をICレコーダーで録音した。これをプロトコル化したものに、その日の店舗の様子や人物の行動などを書き加えて、「フィールドノーツ」を作成した(右参照)。さらに、「フィールドノーツ」に基づく考察をより確かなものとするため、アンケートとインタビューによる調査も最後におこなった。

調査結果から、以下の点が明らかになった。

まず、回収活動の成果として、以下があげられる。

- (1) 割り箸回収活動は、回収店舗の隣店からも興味を示される。
- (2) 回収を通して、回収者と店側との交流が次第に深まってゆく。
- (3) 店側は、協力する中で、次第にリサイクルや環境問題全般に興味をもつ。
- (4) 商店街のごみは事業系扱いなので、店側は、割り箸回収は店の利益にもなると思っている。

次に、課題として、以下があげられる。

- (1) 回収曜日や時間が一定でなく、割り箸の置き場所も決めていないため、店側に迷惑をかけている。ただし、店側は、現状でも構わないという態度を示してくれている。
- (2) 回収間隔が開くと、時期によって悪臭・カビ発生の原因になる。
- (3) 一人で回収を担当すると、店側は、サークル全体で回収しているということを知りにくい。

なお、アンケートやインタビューは、「フィールドノーツ」の考察を概ね裏付けるものであった。

以上から、以下の改善策が必要であることが明らかになった。

- (1) 店側とよく話し合い、もっとも適切な回収曜日・時間や割り箸の置き場所を決める。
- (2) 回収間隔を時期に応じて見直す。例えば、気温や繁勢期などを参考に検討する。
- (3) 2人以上で回収を分担する。その際、活動報告書などの連絡・記録書類を作成する。

上記の改善策をとった上で、成果や活動の趣旨をまとめた文書を作成・活用しながら、協力店の周辺へと活動を拡大していくことが有効だと思われる。これらを実践に移していくことが、今後の課題である。

フィールドノーツ

2005.10.06(木)	
○B店	
阿比留:「こんにちは」	098
B1:「はい」	099
阿比留:「あっ、どうも、いつも世話様です。ありがとうございます。」	100
回収している、隣の店の人が声をかけてくる。	101
C:「~~~~、大学生?」	102
阿比留:「はい、麻布大学です。」	103
C:「何するの?」	104
阿比留:「あの〜、紙のリサイクルできるんです。」	105
C:「あっ、それであれするの!」	106
B3:「出てくる。」	107
B3:「持てる?」	108
阿比留:「結構ありますね?」	109
B3:「う〜ん、ちょっと聞かされたから」	110
阿比留:「そうですね。」	111
B3:「大丈夫?」	112
かごに入れていると、	113
C:「全店回ったら大きいんじゃない?ねえ?」	114
B3:「そうですね〜、結構...」	115
C:「ただ、協力してくれるところ、ね。」	116
阿比留:「ええ」	117
C:「協力しないところねえ」	118
途中で、かごがいっぱいになってしまふ。	119
B3:「大丈夫?」	120
阿比留:「じゃあ、また後でちょっと〜」	121
B3:「そうした方がいいと思う。」	122
阿比留:「そうですね。」	123
B3:「こんなに入らないもん。」	124
阿比留:「ちょっと、じゃあ...」	125
B3:「そこに置いてって、ありがと。」	126
阿比留:「また来ます。」	127